



Title	初期イスラーム時代のマグリブに関するアラビア語史料
Author(s)	余部, 福三
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2002, 2, p. 157-180
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105824
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

初期イスラーム時代のマグリブに関する アラビア語史料

余部 福三*

ローマ人がアフリカ Africa と呼んだ地域（アラビア語のイフリーキーヤ Ifriqiya、現在のチュニジアを中心にアルジェリア北東部、リビアのタラールス地方を含み、マグリブ東部にあたる）は、ローマ時代に経済が飛躍し、非常に多くの都市が発展し、属州の中でも、ローマ化がもっとも浸透していたところである。ローマ人がギリシア語のバルバロイ Barbaroi からバルバリ Barbari（アラビア語の Barbar、いわゆるベルベル）の名で一括した原住民諸氏族の文化的影響も、周辺の山岳地域（ナフーサ山地、ダンマル山地、テブルスーク山地、アウラース山地など）を除いて、小さくなった。しかし、8世紀初頭、アラブが東ローマ（ビザンツ）帝国からこの地を奪ったとき、知識人や富裕層は軍人・官僚とともに、アラブがいまだ征服していなかった地中海諸地域に大挙して避難した。このため、ローマ文化やローマ末期に浸透していたキリスト教が、エジプトやシリア、シチリア、イベリア半島（アンダルス al-Andalus）にも増して急速に衰退し、テルトゥリアヌス、アウグスティヌスなどを生んだラテン語文化もほとんど突然に、消滅した。

したがって、イフリーキーヤでは、被征服民による文献は他地域よりもさらに少なく、皆無に近い。また、イフリーキーヤに関する情報はイタリア半島や、東ローマ帝国領にとどまった小アジア・ギリシアにも伝わらなかったようである。したがって、初期イスラーム時代のイフリーキーヤに関する史料はほぼすべてアラビア語に限られると言ってよい。本稿はアラブ征服から12世紀初頭までのイフリーキーヤの歴史研究に必要なアラビア語文献をかなり網羅的に解題し、なるべく多くの文献について一部をアラビア語のままで紹介することを目的とする。ただし、詳細・厳密な史料の比較・考証や政治・経済・社会・思想などの分析はここでは行わず、紹介にとどめる。

また、現在のモロッコ・アルジェリア北西部を主体とするマグリブ西部（ローマ人が言うマウリタニア Mauritania）は一部の地域を除いて、ローマ時

* 東京経済大学 教授

代にも未開発であり、そのベルベル系住民はいちはやくローマ支配から脱し、長くアラブにも抵抗しつづけた。12世紀初頭までのこの地域に言及するアラビア語文献はきわめて乏しいが、本稿は可能な限り、紹介することにする(12世紀半ばのムワッヒドゥーン国家以後はある程度、文献が豊かになるが、本稿では扱わない)。

1.

アラブによる征服やウマイヤ朝時代に関する伝承はイフリーキーヤのアラブだけでなく、征服に参加したエジプトのフスタート al-Fustāt のアラブの間でも伝えられた。残片が現存するもっとも古い文献は、アッバース朝時代にイラクのワーキディー al-Wāqidi (d. 207/823) が書いた征服史である。これ自体は散逸したが、9世紀後半にイラクの官僚バラズリー al-Balādhuri が著した *Futūḥ al-Buldān* (ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1866) に引用されている。ワーキディーはおそらくフスタートに伝わる伝承の一部に基いたと思われる。その伝承を網羅的に収集したのが、フスタートのイブン・アブディルハカム ‘Abd al-Raḥmān b. ‘Abdillāh b. ‘Abd al-Ḥakam (d. 257/871) による *Futūḥ Miṣr* (ed. C. C. Torrey, New Haven, 1922) である。しかし、これらの伝承は伝奇的要素を多分に含み、クロノロジーが混乱している。また、かれらが征服史を書いた目的は、征服の過程及び敵の降伏の条件、アラブの定着などを明らかにし、それによって現行の税制、土地制度などを合法化したり、若干の改革を目指すことであったことを忘れてはならない。

ويقال إن عبد العزيز بن مروان لما ولي مصر كتب إلى زهير بن قيس وزهير يومئذ ببرقة يأمره بغزو إفريقية فخرج في جمع كثير فلما دنا من قونية وبها عسكر كسيلة بن لمزم عبأ زهير لقتاله وخرج إليه فاقتلا فقتل كسيلة ومن معه ثم انصرف زهير قافلاً إلى برقة. ويقال بل حسان بن النعمان الذي كان وجه زهير بن قيس والله أعلم وكان مقتل كسيلة كما حدثنا يحيى بن بكير عن الليث بن سعد في سنة أربع وستين

حسان بن النعمان. ثم قدم حسان بن النعمان والياً على المغرب أمره عليها عبد الملك بن مروان في سنة ثلث وسبعين فمضى في جيش كبير حتى نزل اطرابلس واجتمع إليه بها من كان خرج من إفريقية واطرابلس فوجه على مقدمته محمد بن أبي بكير وهلال بن ثروان اللواتي وزهير بن قيس ففتح البلاد وأصاب غنائم كثيرة. وخرج إلى مدينة قرطاجنة وفيها الروم فلم يصيب فيها إلا قليلاً من ضعفائهم. فانصرف وغزا الكاهنة وهي إذ ذاك ملكة البربر

وقد غلبت على جُلِّ إفريقية فلقبها على نهر يسمى اليوم نَهْرُ الْبَلَاءِ فاقتتلوا قتالا شديدا فهزمته وقتلت من أصحابه وأسرت منهم ثمانين رجلا وأفلت حَسَّان ونفذ من مكانه إلى أنطابلس فنزل قصورا من حَيْزِ بَرَقَة فَسُمِّيَتْ قُصُورُ حَسَّان واستخلف على إفريقية أبا صلح وكانت أنطابلس ولُوبِيَّة ومَرَايَّة إلى حَدِّ أَجْدَايَةِ من عمل حَسَّان.

一説には、アブドウルアズィーズ・イブン・マルワーンがエジプト総督に任命されたとき、当時バルカ（リビアのベンガーズィー地方）にあったズハイル・イブン・カイスに手紙を送り、イフリーキーヤ遠征を命じたという。かれは大軍を率いて出征し、クサイラ・イブン・ラムズィム（アルジェリア北西部のベルベルの指導者）の軍がいたクーニヤ（カイラワーン付近にあったローマ都市）に近づいたとき、戦闘に備えて隊列を整えたあと、戦いを挑んだ。両軍が戦った結果、クサイラとかれの部下が戦死し、ズハイルがバルカに戻った。一説には、ズハイルを派遣したのはハッサーン・イブン・ヌウマーン（シリアのガッサーン Ghassān 族）であったともいう。神がもつともよく知り給う。クサイラの戦死はヤフヤー・イブン・ブカイルがライス・イブン・サアドに拠って語ったところによると、64/683-4年のことという。つぎに、ハッサーン・イブン・ヌウマーンが73/692-3年、アブドウルマリクによってマグリブ総督に任命されて着任した。かれが大軍を率いて進み、タラーブルスに到ると、イフリーキーヤとタラーブルスから逃れてきた者たちがそこでかれに合流した。かれは先鋒としてムハンマド・イブン・アビー・ブカイル、ルワータ族（ベルベル系）のヒラル・イブン・サルワーン、ズハイル・イブン・カイスを派遣したあと、諸都市を征服し、多くの戦利品を獲得した。しかし、かれはローマ人がいるカルタゴ市を攻めたが、身体が弱いローマ人を少数捕虜にただけで撤退した。そして、かれは、イフリーキーヤの大半を占拠していた当時のベルベルの女王カーヒナを攻撃し、今日「惨劇の川」と呼ばれる川でかの女と会戦した。激戦の結果、かの女はかれを敗り、かれの多くの部下を殺し、80人を捕虜にした。ハッサーンは自分の持ち場からタラーブルスにまで逃れ、バルカ地方との境界にある砦群に拠った。そのため、この砦群はハッサーンの砦と呼ばれるようになった。かれはイフリーキーヤ、すなわち、アンターブルス、ルービヤ、マラーキヤから自らの直轄地域内のアジュダービヤとの境界に至る地域にはアブー・サーリフを代官として置いた。（Ibn ‘Abd al-Hakam, p. 200）

2.

幸いにも、ウマイヤ朝やアッバース朝に反抗したタラーブルス地方のイスラーム化したベルベルの側からも、伝承が残っている。かれらの一部は反乱失敗後、アルジェリア北西部に逃れてルスタム朝を建設し、そのルスタム朝

支持派がマグリブのイバード派に発展し、現在まで継続しているからである。9世紀半ばに著されたとされるイブン・サッラーム Ibn Sallām の *Bad' al-Islām wa Sharā'i' al-Dīn* (ed. W. Schwartz, Shaykh Sālim b. Ya'qūb, Wiesbaden, 1986) は8世紀後半のアッバース朝遠征軍との戦いに詳しい。また、9世紀末にルスタム朝の首都ティリムサーンで商店を営んでいたイブヌッ・サギール Ibn al-Ṣaghīr はイバード派ではなかったようであるが、イバード派の長老からエピソードを集めて、ルスタム朝史 *Akhbār A'immat al-Rustamiyīn* (ed. Muḥammad Nāṣir, Ibrāhīm Baḥāz, Beirut, 1986) を著した。以後、イバード派は派の歴史、派の学者の列伝を継続的に数多く出すようになる。その中で現存する古いものは、ワルグラ・オアシスのワルジュラーニー Abū Zakarīyā' al-Warjlānī (d. 504/1111) の *Kitāb Siyar al-A'imma wa Akhbārihim* (ed. Ismā'il al-'Arabī, Alger, 1979)、ウイスヤーニー Abu'l-Rabi' al-Wisyanī (12世紀後半) の *Kitāb al-Siyar* (写本、ポーランド・クラクフの Smogorzewski 文庫)、それにナフタ・オアシスのダルジーニー Ibn Īkhlaḥ al-Darjīnī (13世紀前半) の *Kitāb Ṭabaqāt al-Mashāyikh bi'l-Maghrib* (ed. Ibrāhīm Ṭallāy, Alger, no date) であり、これらは9-11世紀の文献に基づいている。イバード派の史書は独自の情報を掲載するだけでなく、アラブとは異なる視点を提供する上で貴重である。ただ、ダルジーニーのアラビア語は流麗であるが、他の著者のアラビア語はベルベルなまりが強い。

أخبرني غير واحد من الإباضية عن من تقدم من آبائهم قالوا لما نزلت
الإباضية مدينة تاهرت وأرادوا عمارتها اجتمع رؤساؤهم فقالوا قد علمتم أنه
لا يقيم أمرنا إلا إمام نرجع إليه في أحكامنا وينصف مظلومنا من ظالمنا ويقيم
لنا صلاتنا ونؤدي إليه زكاتنا ويقسم فينا، فقبلوا أمرهم فيما بينهم فوجدوا
كل قبيل منهم فيه رأس أو رأسان أو أكثر يدبر أمر القبيل ويستحق أمر الإمامة
فقال بعضهم لبعض أنتم رؤساء ولا نأمن أن يتقدم واحد على صاحبه فتنفسد
نيته ولعل المقدم أن يرفع أهل بيته وعشيرته على غيرهم فتنفسد النيات ويكثر
الاختلاف ويقل الائتلاف ولكن هذا عبد الرحمن بن رستم لا قبيلة له يشرف
بها ولا عشيرة له تحميه وقد كان الإمام أبو الخطاب رضي لكم عبد الرحمن
قاضيا وناظرا فقلدوه أموركم فإن عدل فذلك الذي أردتم وإن سار فيكم بغير
عدل عزلتموه ولم تكن له قبيلة تمنعه ولا عشيرة تدفع عنه . فإجمعوا رأيهم على
ذلك ثم نهضوا إليه بأجمعهم.

イバード派の複数の人々が父祖から聞いた話として私にこう話した。イバード派がターハルト市に定着し、その建設を始めようとしたとき、かれらの

指導層が集まって、こう言った。「諸君がすでに知っているように、イマーム（宗教政治指導者）なしには我らの生活は成り立たない。イマームこそが、我らの裁きにあたっては裁可をあおぎ、我らの中の被圧政者のために圧政者を罰し、我らの礼拝を指導し、我らが払った救貧税を我らに再分配なさるお方。」かれらはかれらの間にあった状況を吟味した。すると、各部族に一人、二人またはそれ以上の指導者がいて部族の政治を取り仕切り、イマームの力にも匹敵していたことがわかった。かれらはたがいにこう言った。「諸君自身が指導者だ。一人が他の仲間より優越することになって、腐敗することを恐れる。おそらく指導者となった者は自分の一族、氏族を他より優遇し、腐敗し、不和が増え、友好的関係が損なわれるであろう。しかしながら、このアブドゥッラフマーン・イブン・ルスタムは名誉を高めてくれる部族も、保護してくれる氏族もない。イマームのアブル・ハッターブ（アッバース朝に滅ぼされたタラブルス地方の指導者）は諸君に、アブドゥッラフマーンを判事として、監督者として推薦していた。かれに諸君の政治を任せよ。もし、かれが公正に行えば、それは諸君の望むところ。もし、諸君を不公正に扱うなら、諸君はかれを免職したらよい。かれには保護してくれる部族も、守ってくれる氏族もないのだから。」かれらの意見はそれに一致し、全員がかれの方に立ち上がった。（Ibn al-Ṣaghīr, pp. 28-30）

3.

イフリーキーヤの中心都市カイラワーン Qayrawān やトゥーヌス Tūnus（フランス語のチュニス）でアラビア語文献が書かれるようになったのは少し遅く、法律書から始まる。アサド・イブヌル・フラート Asad b. al-Furāt (d. 213/828) の *al-Asadiya* は散逸したが、メディーナの法解釈であるマーリク派とイラクの法解釈であるハナフィー派の両方を含むものであった。これに対し、かれのライバルであったサフヌーン Ṣaḥnūn (d. 240/854) の *al-Mudawwana* (Cairo, 1905) はフスタートのイブヌル・カースィム Ibn al-Qāsim al-‘Utaqī を通じて伝えられたマーリク・イブン・アナスの法解釈を集成し、かれ自身の解釈を加えたものであり、以後、マグリブとアンダルスで聖典的地位を占めるようになった。これはとくに商取引に詳しい。その後を生じた新しい問題については、カイラワーンのイブン・アビー・ザイド Ibn Abī Zayd (d. 386/996) が *Kitāb al-Nawādir wa’l-Ziyādāt ‘ala’l-Mudawwana* (写本 Zaytūna, Fs al-Ṣādiqīya, Tunis, 6 vols.) の中で法解釈を集成した。税法や財政については、ダーウーディー Ibn Naṣr al-Dā’ūdī (d. 402/1011) の *Kitāb al-Amwāl* (英訳 tr. Abu’l-Muḥsin Sharafuddīn, New Delhi, 1999) が詳しく、とくにシチリアにおけるアラブの定着について他に類がない情報を含む。

4.

イフリーキーヤのアラブの間に伝えられた伝承を集めた最古のものは、アラブの名門出身、アブル・アラブ Abu'l-ʿArab b. Tamīm (d. 333/945) による学者の世代別列伝 *Ṭabaqāt ʿUlamāʾ Ifrīqīya wa Tūnus* (ed. ʿAlī al-Shābī, Nuʿaym b. Ḥasan al-Yāfī, Tunis, 1985) である。これは学者のエピソードを集めたものであり、ウマイヤ朝時代やアッバース朝初期に東方から移って来た多くの人々をも収録している。ズィーリー朝時代の有名な医学者イブヌル・ジャッザール Ibn al-Jazzār (d. 395/1004-5) による伝記集は散逸したが、かれより少し若いマーリキー Abu Bakr al-Mālikī の世代別列伝 *Riyāḍ al-Nufūs fī Ṭabaqāt ʿUlamāʾ al-Qayrawān wa Ifrīqīya* (ed. Ḥusayn Muʿnis, Cairo, 1951) に利用されている。これは非常に詳細・大部なもので、冒頭に征服史も添加されている。9世紀後半以後、イフリーキーヤではマーリク派が一般化し、マグリブ全域とアンダルスのマーリク派の法学者列伝が、モロッコ北部のサブタ (セウタ) 出身のカーディー・イヤード Qādī ʿIyāḍ b. Mūsā (d. 544/1149) によって著された (*Tartīb al-Madārik wa Taqrīb al-Masālik bi Maʿrifat al-Mālikīya*, Rabat, 4 vols., no date)。

قال أبو العرب: أبو عمرو البهلول بن راشد كان ثقة، مجتهدا، ورعا، لا يشك في أنه مستجاب الدعوة، وكان عنده علم كثير، سمع من مالك بن أنس ومن سفيان الثوري، ومن عبد الرحمن بن زياد بن أنعم، ومن موسى بن علي بن رباح، ومن الليث بن سعد، ومن الحارث بن نهبان — أحسبه سمع منه لما دخل الحارث إفريقية — قال [أبو العرب]: وإنما روى جامع سفيان الكبير البهلول بن راشد، عن علي بن زياد، عن سفيان. وحدثني محمد بن خالد، عن أبيه قال: قال لنا البهلول بن راشد «قوموا بنا نذهب إلى ابن خارجة [عنيسة بن خارجة] نسمع منه جامع سفيان الثوري — يعني جامع في الرأي — وقد سمع البهلول من حنظلة بن أبي سفيان بمكة.

قال [أبو العرب]: ولقد ذكر حمديس القطن، أنه سمع سحنون بن سعيد يقول: كان البهلول بن راشد، ورياح بن يزيد، فكان الذكر لرياح، فلما مات عاد الذكر للبهلول فما ذاك إلا من [خبيثة] كانت للبهلول.

アブル・アラブ曰く。アブー・アムル・ブフルール・イブン・ラーシドは伝承伝達者として信頼性があり、イジュティハード (合理的思考の努力) の有資格者であり、敬虔でもある。かれが祈れば、疑いもなく願いが聞き入れられるし、多くの個別的知識をもつ。かれはマーリク・イブン・アナス、スフヤーン・アッ・サウリー (クーファの法学者)、アブドウッラフマーン・イブン・ズィヤード・イブン・アンアム、ムーサー・イブン・アリー・イブ

ン・ラバーフ、ライス・イブン・サアド、ハーリス・イブン・ナフバーンから講義を聞いた。ハーリスについては、イフリーキーヤに来たときに、講義を聞いたと私は推測する。アブル・アラブ曰く。ブフルールは大スフヤーンの『集成』を、スフヤーン自身から聞いたアリー・イブン・ズィヤードから聞いて講義したものである。また、ムハンマド・イブン・ハーリドがかれの父から聞いて私に語ったところによると、ブフルール・イブン・ラーシドは「さあ、我々はアンバサ・イブン・ハーリジャのところに行き、かれからスフヤーン・アッ・サウリーの『集成』(つまり理性的見解に関するかれの『集成』のこと)を聞こう」と言ったという。ブフルールはメッカではハンザラ・イブン・アビー・スフヤーンから講義を聞いた。アブル・アラブ曰く。ハムディース・アル・カッターンによると、サフヌーン・イブン・サイードは「ブフルール・イブン・ラーシドとラバーフ・イブン・ヤズィードが居たが、名声はラバーフのものであり、かれの死後、名声がブフルールにもどって来た。それは単にブフルールに威厳があったからに過ぎない。」と言ったという。(Abu'l-Arab, pp. 126-7)

ذَكَرَ مُحْتَمُهُ رَضِيَ اللَّهُ تَعَالَى عَنْهُ : كَانَ رَحِمَهُ اللَّهُ تَعَالَى فِي زَمَانِ مُحَمَّدِ بْنِ مِقَاتِلِ الْعَكِّي أَمِيرِ إِفْرِيقِيَّةٍ، وَكَانَ يَلَاظِفُ الطَّاعِيَةَ، وَيَبْعَثُ إِلَيْهِ بِالْأَلْطَافِ وَيُكَافِئُهُ الطَّاعِيَةَ، فَكُتِبَ الطَّاعِيَةَ إِلَى الْعَكِّي أَنْ يَبْعَثَ إِلَيَّْ بِالْخَاسِ وَالْحَدِيدِ وَالسَّلَاحِ، فَلَمَّا عَزَمَ الْعَكِّي عَلَى ذَلِكَ وَ[أَرَادَ] أَنْ يَبْعَثَ إِلَيْهِ بِمَا طَلَبَ، لَمْ يَسْعَ الْبَهْلُولُ السَّكُوتَ، فَتَكَلَّمَ وَعَارِضَ الْعَكِّي، وَوَعَظَهُ، لَتَنْزُولِ عَنْهُ الْحِجَّةُ مِنَ اللَّهِ عَزَّ وَجَلَّ، فَلَمَّا أَلَحَّ عَلَيْهِ فِي ذَلِكَ بَعَثَ الْعَكِّي إِلَيْهِ فَضْرِبَهُ. وَقِيلَ إِنَّهُ لَمَّا قَيْدَهُ فَمَدَّتْ رِجْلَاهُ لِلْقَيْدِ قَالَ الْبَهْلُولُ : إِنْ هَذَا الضَّرْبُ مِنَ الْبَلَاءِ الَّذِي لَمْ أَسْأَلِ اللَّهَ عَزَّ وَجَلَّ الْعَافِيَةَ مِنْهُ قَطُّ. وَقِيلَ إِنَّهُ لَمَّا بَعَثَ وَرَاءَهُ لِيَضْرِبَهُ تَحَاشَدَ إِلَيْهِ النَّاسُ وَالْجَامَاعَاتُ، فَزَادَ الْعَكِّي ذَلِكَ حَنْقًا عَلَيْهِ، فَأَخْرَجَ إِلَى النَّاسِ أَجْنَادَهُ فَفَرَّقُوهُمْ، وَأَمَرَ بِتَجْرِيدِهِ وَضْرِبِهِ، فَرَمَى عَلَيْهِ بِأَنْفُسِهِمْ جَمَاعَةً، فَضَرَبُوا. ثُمَّ ضَرَبَ أَسْوَاطًا دُونَ الْعَشْرِينَ، وَحَبَسَهُ ثُمَّ أَخْرَجَهُ فَبَرَأَ الضَّرْبَ مِنْ جَسَمِهِ إِلَّا أَثَرَ سَوْطٍ وَاحِدٍ فَتَغَلَّ، فَكَانَ ذَلِكَ سَبَبَ مَوْتِهِ.

かれ (ブフルール) (いと高き神よ、かれをいつくしみ給え) の破滅についての記述。いと高き神がかれを召し給うたのはアック族のムハンマド・イブン・ムカーティル (ホラーサーン軍指揮官) がイフリーキーヤ総督の時代 (181-3/797-9) のことである。かれは暴君 (東ローマのシチリア総督) と友好関係を築き、かれに贈り物を届けて、暴君もまたかれに報いていた。暴君はアッキーに「私のもとに銅、鉄、武器を送ってくれ」と手紙を書いた。アッキーがそれに応じる決心をし、求められたものを送ろうとしたとき、ブフルールはだまってはおれず、至高なる神から非難を免れるように、議論で抵

抗し、かれを諫めた。かれ（ブフルール）がそのことで固執したとき、アッキーはかれを連行させてむち打った。一説には、かれに足かせをかけ、かれの両足が足かせまで伸びたとき、ブフルールは「このむち打ちは、私が至高なる神にその傷からの回復を決して願わないような試練のひとつである」と言ったという。また一説によると、かれをむち打つために追っ手を送ったとき、人々や群衆がかれの回りに集まり、そのため、アッキーの怒りはいつそう大きくなった。かれは兵を派遣して人々を四散させ、ブフルールを裸にしてむち打つことを命じた。多くの人がかれの上におおいかぶさり、ムチを打たれた。つぎに、かれは20回以下のムチを打たれた。かれ（アッキー）はかれを投獄したあと、釈放した。かれの身体から傷痕が消滅したが、一つのむち打ちの跡だけが残し、潰瘍化した。それがかれの死の原因であった。（Mālikī, pp. 141-2）

5.

征服以後のもっとも詳細な歴史は、カイラワーンのラキーク Raqīq b. al-Qāsim (d. 418/1027-8以後) による *Ta'rikh Ifrīqiya wa'l-Maghrib* である。これは散逸したと考えられていたが、最近、ラバートで発見された冒頭と後半部分を欠く写本がラキークの歴史として出版された (ed. 'Abdullāh al-'Alī al-Zaydān, 'Izz al-Dīn 'Umar Mūsā, Beirut, 1990)。これはラキークの歴史そのものではないにしても、もっとも詳細であり、少なくとも原型をもっともとどめるであろう。しかし、これには伝承者を示すイスナードは省略されているし、総督イブラーヒーム・イブヌル・アグラブ (184-97/800-12) までで途切れてしまっている。ラキークの後半部分は、イラク北部モースルのイブヌル・アシール Ibn al-Athīr (d. 630/1233) の世界史 *al-Kāmil fī'l-Ta'rikh* (ed. C. Tornberg, 13 vols. Beirut, 1965-7)、アンダルスのイブヌル・アッバール Ibn al-Abbār (d. 658/1260) のアンダルス・マグリブの詩作した政治家の列伝 *al-Ḥulla al-Sayrā'* (ed. Ḥusayn Mu'nis, 2 vols. Cairo, 1963-4)、モロッコのイブン・イザーリー Ibn 'Idharī (14世紀初頭) のマグリブ・アンダルス史 *al-Bayān al-Mughrib fī Akhbār al-Andalus wa'l-Maghrib* (ed. C. S. Colin, E. Lévi-Provençal, vol. 1, Beirut, 1980)、エジプトのヌワイリー al-Nuwayrī (d. 732/1332) の百科全書 *Nihāyat al-Arab fī Funūn al-Adab* (vol. 24, ed. Ḥusayn Naṣṣār, 1984) などに簡略化され保存されている。

また、アッバース朝時代の代表的な「世界史」（ムスリムから見た世界史であり、イスラーム史と言ってよい）であるタバリー al-Ṭabarī (d.310/923) の *Ta'rikh al-Rusul wa'l-Mulūk* はイフリーキーヤをほとんど無視しているが、その簡略本 *al-'Uyūn wa'l-Ḥadā'iq fī Akhbār al-Ḥaqā'iq* (vol. 1 の刊本 *Frag-*

menta Historicorum Arabicorum, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1869, vol.4, ed. 'Umar al-Sa'idī, Damascus, 1972) には、イフリーキーヤの記事が散見される。これは医学者イブヌル・ジャッザールによる散逸した歴史書に拠ったものと思われる。

وكان سبب عزل ابن العكي عن المغرب أنه اقتطع من أرزاق الجند وأساء السيرة فيهم وفي الرعية، وأنّ فلأحًا القائد مشى في أهل الشام وأهل خراسان فلم يزل بهم حتى اجتمع رأيهم على تقديم مرة بن مخلد الأزدي وخرج عليه بتونس تمام بن تميم التميمي، وكان عامله عليها، وقد بايعه جماعة من القواد، وأهل الشام وأهل خراسان، فزحف في النصف من شهر رمضان سنة ثلاث وثمانين ومائة متوجهًا إلى القيروان وخرج إليه ابن العكي فيمن معه، فاقتتلوا قتالًا شديدًا في منية الخيل، فانهزم ابن العكي فدخل القيروان، ومضى إلى دار كان قبل بناها، فتحصن فيها، وجلى عن دار الإمارة، فأقبل تمام فعسكر خلف الوادي بباب أبي الربيع عند مصلى روح بن حاتم، فلما أصبح تمام فتحت له أبواب القيروان، فدخلها يوم الأربعاء لخمس بقين من شهر رمضان، فأمنه تمام على دمه وماله على أن يخرج عنه. فخرج عنها تلك الليلة فسار حتى وصل إلى طرابلس ثم مضى منها إلى سرت. ولحق بطرابلس قوم من أهل خراسان منهم عباس بن طرخون صاحب شرطته وأبو العنبر كاتبه، فأجمع رأيهم على أن يكتبوا إليه بالرجوع إلى طرابلس، فأرسلوا إليه وهو مقيم بسرت، فرجع إلى طرابلس. وأقام تمام بالقيروان، فنبهض إليه إبراهيم بن الأغلب من الزاب في نصرة ابن العكي، فلما بلغ تمامًا إقباله إليه جلى عن القيروان، ومضى إلى تونس، ودخل إبراهيم بن الأغلب القيروان بعد أن قدم عمران بن محالد.

イブヌル・アッキー (ムハンマド・イブン・ムカーティル) がマグリブ総督職から免職された理由は、軍の給与をカットし、かれらや臣民に圧政を働いたことである。指揮官のファラーフがシリアやホラーサーンの兵を率いて蜂起し、かれらの意見がアズド族のムッラ・イブン・ムハッラド擁立に一致するまで、指導しつづけた。ついで、多くの指揮官やシリア、ホラーサーンの兵が忠誠を誓っていたトゥーヌス代官、タミーム族のタンマーム・イブン・タミーム (アブル・アラブの祖先) がトゥーヌスで反乱を起こした。かれは183年ラマダーン月半ば (799年10月)、カイラワーンに向けて進軍した。イブヌル・アッキーは配下の兵を率いて出撃し、かれらは「馬の荘園」ではげしく戦った。その結果、イブヌル・アッキーが敗れてカイラワーンに入り、以前に建てていた邸宅に向かってそこで籠城し、総督官邸を放棄した。タンマームは (カイラワーンに) 進み、アブッ・ラビー門の川の外側にあるラウフ・イブン・ハーティム (アッバース朝の総督) の露天礼拝所に軍営を張つ

た。ラマダーン月25日の朝になると、タンマームのために、カイラワーンの城門は開放され、かれは入城した。タンマームはかれ（イブヌル・アッキー）に対し降伏を条件に、かれの生命と財産に保証を与えた。その夜、かれはカイラワーンから出て、タラブルスに着くまで進み、そのあとスルトまで進んだ。かれの警察長官アッバース・イブン・タルフーンやかれの書記官アブル・アンバルを含め、ホラーサーンの人々がタラブルスに落ちのびると、かれにタラブルスに戻るよう手紙を書くことに意見が一致した。かれらはスルトにいたかれに手紙を送り、かれはタラブルスに戻って来た。一方、タンマームはカイラワーンに居を定めたが、イブラーヒーム・イブヌル・アグラブ（ホラーサーン軍、ザーブ地方の代官）がかれに対してイブヌル・アッキーを支持して、ザーブから立ち上がった。かれのカイラワーン接近の報に接すると、タンマームはカイラワーンから離れてトゥヌスに戻り、イブラーヒームがイムラーン・イブン・ムジャーリド（タミーム族）を先鋒として派遣したあと、カイラワーンに入った。(Raḡīq, pp. 170-1)

فلما بلغ منصور بن نصر الطَّنْبُذِي وهو من ولد دُرَيْد بن الصَّمَّة ذلك ساءه، وكان على طرابلس. فقال: «يا بني تميم، لو أن لي بكم قوة أو آوى إلى ركن شديد». فكتب صاحب الخير بكلامه إلى زيادة الله. فعزله واستقدمه، فقدم. وكان غلبون معتنيا به فأصلح أمره عند الأمير زيادة الله، فحلى عنه. فأقام أيامًا يتردد إلى زيادة الله حتى ذهب ما بقلبه عليه. ثم استأذنه في الوصول إلى منزله فأذن له. فخرج إلى تونس، وكان له بإقليم المحمدية قصر يقال له طُنْبُذَة، وبه لقب الطنبُذِي، فنزل به. وجعل يرأسل الجند ويذكر لهم ما يلقون من زيادة الله وما فعل بعمر بن معاوية وابنيه، ويخوفهم أن يفعل بهم وبأولادهم كفعله بعمر و.

فبلغ ذلك زيادة الله فعرض الجند على عاداته. ثم دعا محمد بن حمزة فأخرجهم في خمسمائة فارس بالسلاح كما عَرَضُوا بين يديه وقال له: «امض إلى تونس فلا يشعر منصور إلا وقد أخذته ومن معه، وأقدم به موثقًا». فخرج ابن حمزة حتى أتى تونس فلقى منصورًا غائبًا بقصره، فنزل في دار الصناعة. ووجه إلى منصور شجرة بن عيسى القاضي وأربعين شيخًا من أهل تونس، يُرَغِّبه في الطاعة ويدعوه إلى إتيانه. فمضوا إليه وأبلغوه رسالة محمد بن حمزة فقال: «ما خلعت يدا من طاعة، ولا أحدثت حديثًا، وأنا صائر إليه معكم. ولكن أقيموا على يومي هذا حتى أعدَّ لهؤلاء القوم ما يُصلحهم». فأقاموا فوجه إلى ابن حمزة ببقر وغنم وعلف وأحمال نبذ. وكتب إليه: «إني قادم بالغداة مع القاضي». فركن إلى قوله، وأخذ هو ومن معه في الأكل والشرب. فلما أمسى منصور قبض على القاضي ومن معه، وحبسهم في قصره.

وجمع خيله ورَجَله ومضى إلى تونس . فما شعر به محمد بن حمزة حتى ضرب طبوله على باب دار الصناعة . فقام ابن حمزة وأصحابه لأخذ سلاحهم وقد عمل الشراب فيهم . فأوقع بهم منصور وأصحابه فقتلهم . ولم يسلم منهم إلا من ألقى نفسه في البحر فسبح . وأصبح منصور ، فاجتمع إليه الجند . وكان عامل زيادة الله على تونس . إسماعيل بن سفيان بن سالم من أهل بيت زيادة الله ، وقتله منصور وقتل ابنه .

ドゥライド・イブヌッ・スィンマ（カイス系ハワーズィン族）の子孫であるタラーブルス総督、マンスール・イブン・ナスル・アッ・トゥンブジーがそれ（カイス系のカスライン代官アムル・イブン・ムアーウィヤの処刑）を聞くと、悲しみ、「タミーム族の者共（アグラブ朝）よ。諸君にうち勝つ力があるか、頑丈な柱にすがることさえできればよいのに」と感嘆した。情報官はかれのことばをズィヤーダトゥッラー（イフリーキーヤ総督、イブラーヒーム・イブヌル・アグラブの子）に伝えた。後者はかれを免職して召還し、かれが到着した。ガルブーンがかれのことを心配し、総督ズィヤーダトゥッラーにかれの件をとりなした結果、かれは釈放された。ズィヤーダトゥッラーが心に抱く敵意がなくなるまで、かれ（マンスール）は数日間、ズィヤーダトゥッラーのもとに通いつづけた。そのあと、かれに自分の家に帰る許可を求め、許されたあと、トゥーヌスに行った。かれはムハンマディーヤ郡（トゥーヌス南郊外）にトゥンブザという宮殿つきの荘園をもっており、それでトゥンブジーと呼ばれていた。かれはそこに居を定めると、軍に手紙を送りはじめ、かれらがズィヤーダトゥッラーから受けた仕打ちや、かれがアムル・イブン・ムアーウィヤと二人の子に行ったやり口をあげ、かれらや子供たちに、アムルに対して行ったようなことをするであろうと脅した（209/824-5年）。ズィヤーダトゥッラーはそれを聞くと、いつものように軍の閲兵を行ったあと、ムハンマド・イブン・ハムザを呼んで、あたかもかれの前で閲兵を受けるかのような武器を装備した500騎とともに出征させた。かれは「マンスールとかれの配下の者を捕えるまで、かれが気づかないように、トゥーヌスに進め。そして、縄でしばって、かれを連行せよ」と命じた。イブン・ハムザは出征してトゥーヌスまで来たが、マンスールはかれの荘園にいて、留守であった。かれ（イブン・ハムザ）は造船所に陣を構え、マンスールには判事シャジャラ・イブン・イーサーとトゥーヌス市民の長老40人を派遣し、服従を勧め、自分のもとに来るように呼びかけた。かれらがかれのもとに行つて、ムハンマド・イブン・ハムザの手紙を渡すと、かれは「私は謀反を起こしたことも、事件を起こしたこともない。諸君といっしょにかれのもとに行こう。しかし、今日のところは、これらの人々（イブン・ハムザの兵）をもてなすものを用意するまで、私のところでゆっくりしてくれ」と答えた。かれらは（そこに）とどまり、かれはイブン・ハムザのもとに牛、羊、馬の飼料、ワインの荷を送るとともに、「私は明日の朝、判事といっしょに

出頭します」と手紙を書いた。かれはかれのことばを信頼し、かれと配下の兵は食べたり、飲んだりしはじめた。夕方になると、マンスールは判事とその一行を捕え、荘園内に投獄した。かれは騎兵と歩兵を集め、トゥーヌスに進んだ。ムハンマド・イブン・ハムザはかれ(マンスール)が造船所の門の前で太鼓を打つまで、気づかなかった。イブン・ハムザとかれの兵は立ち上って武器を取ったが、酒の酔いが回っていた。マンスールと配下の兵はかれらに襲いかかって、殺した。海に飛びこんで泳いだ者を除いて、誰も助からなかった。朝になると、マンスールのもとに(トゥーヌスの)軍が集結した。ズィヤーダトゥッラーのトゥーヌス代官イスマーイル・イブン・スフヤーン・イブン・サーリムはズィヤーダトゥッラーの一族であった。マンスールはかれとかれの子を殺した。(Nuwayrī, vol. 24, pp. 108-110)

وصار أمر الجند إلى عامر، وظن أن الأمور تستقيم له فكان الأمر على الضد. وكتب إليه زيادة الله يدعو إلى الطاعة ويعرفه بإشفاقه عليه وعلى حرمة، ويحذره عاقبة منصور الطنبُذِي قتيله، ويخلف له بأنه لا يحقد عليه مع الإنابة، وبأنه مُعيَّده إلى ما كان عليه مع أبيه إبراهيم بن الأغلب وأخيه عبد الله بن إبراهيم، فأجابه عامر برسالة بليغة أولها: «أما بعد، فقد أتاني كتابك، وفهمت ما ذكرت أنك شفيق على ذرية وعيال صيرتها بأرض مضیعة وعدو مكثف وفتنة أوقدها من صيره الله جزلا لها، وصيرت نفسي مكانه فيها، وقد كنت أنا الشفيق عليها، والناصر لها في الأيام التي قطعت بالتهديد قلوبها، وحرصت على إيتامها وكشف سترها، إذ كنت أغدو وأروح إلى بابك متوقعا لأمرك بسفك دمي من وراء حجابك، وإن كان شعارى كنفي أعتد به دون دنارى، مُكْتَتِما من الخلق، لا يظهر إلى منك إلا أصلح قطوب، ولا يبلغني عنك إلا تجني الذنوب، وقد كان نظرك ونصرتك لتلك الحرم أحق منك قبل اليوم بها، وتسكينك لروعتها أولى وأحرى».

وآخرها: «ثم ذكرت أنه لا حقد ولا إحنة ولا تيرة إلا وذلك مضمحل مع الألفة والإنابة، فقد والله حقدت بلا ذنب ووترت بلا تيرة، وحلفت بعهود ومواثيق وأيمان مغلظة قلدتها عنقك وأخفرت بها مرارا ذمتك وما بيني وبينك هودة إلا ضرب السيف، حتى تضع الحرب أوزارها، ويحكم الله بيننا وهو خير الحاكمين» فلما أيقن بالموت دعا بينه وأوصاهم باللاحاق بزيادة/الله فعملوا برأيه، واستأمنوا إليه بعد موته، فسرتهم وأمنهم وأحسن إليهم، وقال عند ما بلغه موت عامر: «الآن وضعت الحرب أوزارها» فكان كذلك.

(マンスールの殺害後) 軍の指揮権はアーミル(イブン・ナーフィウ)に移った。かれはすべてが自分の支配下に入ったと思ったが、事態はその逆であ

った。ズィヤーダトゥッラーはかれに手紙を送り、服従を呼びかけ、かれとかれの妻子のことを心配していると知らせ、かれに殺されたマンスール・アッ・トゥンプジの運命をたどることを警告し、配下に復帰さえすれば、憎んだりしないし、父イブラーヒーム・イブヌル・アグラブや兄弟アブドゥッラー・イブン・イブラーヒームのときに占めていた地位に戻してやると誓った。アーミルは流麗な筆致の手紙を返した。その冒頭は以下の通りである。「さて、あなたの手紙を受け取りました。あなたは、失われた大地、とり囲まれた敵、神が燃料として置かれた者（マンスールのこと）が火をつけた内乱の中に、あなた自身が置いた妻子、家族のことを心配しているとおっしゃる。私はその男のかわりにそこに自分を置きました。私こそがかれらのことを心配し、あなたが脅迫してかれらの心を切り裂き、かれらを父なし子にし、かの女らのヴェールをはがすのに熱心であった日々に、かれらを援助しました。上着の下に、人々からは見えない経帷子を下着として着用していたにせよ、密室内で私を殺せというあなたの命令を予期しながら、私が朝な夕なにあなたのもとに通っていたときのことです。あなたと言えば、体制を立て直したり、罪を犯す話しか聞いたことがない。あなたがそれらの妻子の面倒を見たり、援助するのは今日以前の方があなたにふさわしかったし、かれらの恐れを静めるのも（今日以前の方が）がより適切であった」／手紙の終わりの部分は以下の通りである。「つぎに、あなたは、恨みや憎しみ、復讐心は友好や原状回復とともに弱まる一方でしかない」と述べた。しかし、神に誓って、あなたは罪もないのに恨み、復讐する理由もないのに危害を加えた。あなたは自分の首をかけた固い契約、約定、誓約を誓っては、何度となく破ってきた。私とあなたとの間は戦いが終結し、神が我々を裁かれるまで、剣をふるうことによってしか平和の回復はない。神はもっとも善き審判者である。」／……かれ（アーミル）は死を悟ったとき、子たちを呼び、ズィヤーダトゥッラーに従うように遺言した。かれらはかれの意見の通りにし、かれの死後、かれ（ズィヤーダトゥッラー）に生命の保証を求めた。かれはかれらの申し出を喜び、保証を与え、かれらに善処した。アーミルの死が伝わると、かれ（ズィヤーダトゥッラー）は「今や、戦いは終結した」と言ったが、実際、その通りであった（213/828年）。(Ibn al-Abbār, vol. 2, pp. 384-5)

6.

シーア派の革命派イスマーイール派がアルジェリア中部のカビーリヤ Qabā'il 山地のベルベル系山岳民の諸氏族（クターマ Kutāma 族と総称される）を結集して、10世紀初頭にアッバース朝のイフリーキーヤ総督であったアグラブ朝を打倒し、ファーティマ朝を建国した。この大変動については、新国家のイデオログ、カーディー・ヌウマーン al-Qādī Nu'mān (d. 363/974) が詳細な革命史 *Ifritāḥ al-Da'wa* (ed. Farḥāt Dashrāwī, Tunis, 1975) を残した。

イブヌル・アシール、ヌワイリー、イブン・ハルドゥーンなどは『イフティターフ』を要約するだけであるが、イブン・イザーリーは『イフティターフ』を利用せず、イフリーキーヤからアンダルスに亡命した歴史家ワッラーク Muḥammad b. Yūsuf al-Warrāq (d. 363/974) に拠っている。

ファーティマ朝に対し、アルジェリア北東部アウラース山地の山岳民ハッワーラ族が宗教指導者アブー・ヤズィードの指導下にクターマ族と同様な国家建設運動を起こした。これについては運動内部からの記録はなく、勝利したファーティマ朝側の詳細な記録が残っているだけである。この歴史は反乱当時の首都マフディーヤの判事マルワッルージー Aḥmad b. Muḥammad al-Marwarrūdhī が書いたものと思われ、散逸したが、主要部分はイエメンのイスマーイル派の宣教員イドリース Idrīs ʿImād al-Dīn (d. 872/1468) の派史 ʿUyūn al-Akḥbār (vol. 5, ed. Muṣṭafā Ghālib, Beirut, 1975) に引用されている。また、アルジェリア北部の中央高地に居住するサンハージャ族の指導者がファーティマ朝に協力し、ファーティマ朝のエジプト東遷後、イフリーキーヤ総督になり、ズィーリー朝を開いた。その傍系ハンマード朝の子孫、イブン・ハンマード Ibn Ḥammād (Ḥamādu) (d. 628/1230) もファーティマ朝史 Akḥbār Mulūk Banī ʿUbayd (ed. M. Vonderheyden, Algier, 1927) の中でこれを大幅に引用している。イブヌル・アシールとイブン・ハルドゥーンはファーティマ朝側の記録を大幅に要約しているだけである。

وسار القوم فدخلوا أحد بلاد كُتامة يوم الخميس للنصف من شهر ربيع
الأول سنة ثمانين ومائتين، ومعهم أبو عبد الله الأندلسي وأبو القاسم
الورجومي. فننازع أبا عبد الله كل واحد من الكتاميين ليذهب به إلى
موضعه رغبة فيه، وحرصاً عليه، حتى صار أمرهم في ذلك إلى التشاح والمتابذة
ثم آل أمره إلى أن يُخَيَّرَوه في حيث يحب أن يقصد عنهم وتراضوا في ذلك فقال
في أي موضع عندكم فتح يسمي فتح الأختيار؟ فنظر بعضهم إلى بعض، كأنهم
رأوا أنه قد علم ذلك. قالوا هو عند بني سكتان وطريقهم من هذا الموضع فيه.
قال: فإليه نقصد ثم نأتي كل قوم منكم إن شاء الله في مواضعهم، ونزورهم في
بيوتهم، ولا نجعل لأحد منكم من نفسي حظاً دون أحد، فأرضاهم ذلك، وسار
كل قوم منهم إلى جهتهم.

ونزل أبو عبد الله بإيكلجان، فأقام به، وصدر عنه كل من كان معه
من الحجاج من كُتامة إلى مواضعهم، فأخبروا من قدموا عليه من أصحابهم
بأخاره، ووصفوا لهم علمه وحاله — فأقبل الناس إليه من كل ناحية،
وتسامعوا به. فكان يجلس لهم ويحدثهم بظاهر فضائل علي بن أبي طالب

(صلوات الله عليه، وعلى الأئمة من ولده عليهم السلام). فإذا رأى الواحد منهم بعد الواحد قد لقين عنه وأحس فيه ما يريد ألقى إليه شيئاً بعد شيء حتى يجيبه فيأخذ عليه.

واستشهر أمر أبي عبد الله ببلد كُتامة وسمي المشرقى، لقدومه من المشرق. ثم نسب إليه كل من بايعه، ودخل في دعوته، وسموا المشاركة. وإذا دخل الواحد منهم في ذلك قيل: تشرق. ورأى الناس من صلاح أحوال من دخل دعوته وتويعهم عما كانوا يعرفونهم عليه، من الفساد، وإقبالهم على الصلاة والصيام، وأعمال البر، ما رغبتهم في الدخول في ذلك. فتسارب الناس إليه وأطلق الدعوة لمن ارتضاة منهم من قبائلهم. فلما نظر رؤساء القبائل، وولاة البلدان ذلك ولم يروا هضة من إبراهيم بن أحمد في أمره، وخافوا على زوال رئاستهم من أيديهم، وتقدم من سارع إلى أمره ممن كانوا يروونهم دونهم عليهم، كتب بعضهم إلى بعض في ذلك، واجتمعوا، وتراسلوا، وتعاهدوا.

一行は進んで、280年ラビー初月半ば(893年4月)木曜日にクターマ族の国の一つに入った。一行にはアンダルスのアブー・アブディッラーとワルファジューマ族(バルベル系)のアブル・カースィムが同行した。クターマ族の銘々の者がアブー・アブディッラー(イスマーイール派の宣教員)を欲しがり、自分の故郷に誘おうとして争い、とうとうそれは口論、けんかにまで発展した。結局、かれらはかれに行きたいところを選ばせ、それで納得することになった。かれは「どこに義人たちの峠と呼ばれる峠があるか」と尋ねた。かれらはあたかもかれがその場所を知っていたのかと不思議がるかのように、たがいに顔を見合わせて、「それはサクターン族の居住区にあります。かれらのところにはここから行きます」と言った。かれは「そこを目指そう。それから、神が望み給うなら、我らは諸君の銘々の氏族の居住区を回り、家を訪ねましょう。我らは諸君の誰かを他よりえこひいきしたりはしない」と言って、かれらを満足させた。銘々の氏族は自分の故郷に帰っていった。……アブー・アブディッラーはイークジャーニに定着し、かれに同行していたクターマ族の巡礼者はすべてかれのもとから故郷に去っていき、出会った仲間にかれのことを話し、かれの知識と様子がどんなものかを述べた。人々はあらゆる場所からかれのもとに集まり、たがいに噂をしあった。かれはかれらとともに座し、アリー・イブン・アビー・ターリブ(4代カリフ)(神よかれとかれの子孫のイマームたち[かれらに平安あれ]に祝福を与え給え)の徳性の外面部分を説いた。一人また一人と、目的が達成できそうな者を見つけると、一つ一つ教説を進め、最後には相手に受け入れさせ、誓いを立てさせた。……

クターマ族の国ではアブー・アブディッラーのことは有名になり、かれは東方から来たためマシュリキー(東の人)と呼ばれるようになった。かれに忠誠を誓い、かれの宣教に応じた者はすべてその名前に結びつけられ、マシ

ヤーリカと呼ばれるようになったし、かれらの一人が宣教に応じると、「かれは東方人になった」と言われた。人々のかれの宣教に応じた者が高潔になり、以前に知られていた無法状態からきっぱり脱して、礼拝と断食、その他の功德に精を出しているのを見ると、自分たちもそれに加わりた望むようになった。人々は続々とかれのもとに集まり、かれはこれと思った氏族民に宣教した。氏族の指導者たちと諸国の代官たちはその事態を見て、しかも、イブラーヒーム・イブン・アフマド (アグラブ朝、イフリーキーヤ総督 261-89/875-902) がその件で何もしないのを見ると、かれらの指導権が侵され、いちはやくかれ (アブー・アブディッラー) の下に走った目下の者たちが優位に立つことを恐れた。かれらはそのことで手紙をたがいに書き、集まり、通信しあい、(同盟の) 契約を結んだ (*Ifitāh*, pp. 47, 49, 79)

ثم عاد إلى أوراس، ونزل هو وصاحبه، أبو عمار الأعمى بموضع يقال له: النوات، في أوراس، وما برحا يجمعان من يرى رأى الخوارج المارقة إليهما ويحضان على القيام على الدولة العلوية ويقولان: إنه قد خفي ذكر أبي بكر، وعمر، وظهر فضل علي بن أبي طالب عليه السلام، واشتهر. حتى اجتمعت لأبي يزيد جماعة فعاقدهم، وحالفهم على أنهم ما أخذوه من مال المسلمين، حكموا فيه كما يحكم في غنائم المشركين، وأن ما سبوه من النساء والذرية فهو مباح لهم، غير محرم عليهم، فمضى اجتمعت جماعتهم، وملكوا المهديّة، وأزالوا الدولة العلوية، رجعوا إلى الخيار، فاخترأوا من ترضاه جماعتهم، فولوه عليهم. وكان أبو يزيد إذا لقي أحدا يذكر له الشيخين أبا بكر وعمر، ويشفع على الشيعة لبغضهما، وأنهم لا يرون بهما، ويأتي أهل الرئاسة من حيث يحبون في تزيين الرئاسة لهم، وإن السلطان قد ساوى بينهم، وبين غيرهم، من هو دونهم، وإذا لقي من هم الغارة والفتنة من الغوغاء والعوام، أناهم من باب تحليل الأموال والفروج، يحضهم على القيام والخروج، حتى اجتمع مع أبي يزيد مائتا فارس، فقصد باغاية بهم.

それからアブー・ヤズィードはアウラース山地に戻り、同僚である盲目のアブー・アンマールとともにアウラース山中のナワーラートというところに定着した。二人は異端的なハワーリジュ派の見解をもつ者を自分の側に集めつけ、アリー朝 (ファーティマ朝) に対して立ち上がるように扇動し、「(ファーティマ朝は) アブー・バクル (初代カリフ) とウマル (2代カリフ) を無視し、アリー (かれに平安あれ) の徳性のみを喧伝している」と訴えた。これは知れわたり、ついには多くの者がアブー・ヤズィードのもとに結集した。かれは、かれらがムスリムから取り上げたものを異教徒からの戦利品と同様に処置し、捕虜にしたムスリムの女性・子供を、禁じられたものではなく、自分の好きにしてよいものとし、また、かれらが結集してマフディーヤ

を占領し、アリー朝を排除したあかつきには、かれらは選挙を行い、皆が満足できる人を選んで、支配者の地位につける条件で、かれらと契約を結び、誓いを立てた。アブー・ヤズィードは誰かに会々と、二人の長老アブー・バクルとウマルをほめ、その二人を憎み、二人を良く思わないとしてシーア派と敵対した。(氏族の)指導者たちに対してはかれらの指導性を美化し、政府(ファーティマ朝)がかれらと目下の者を平等に扱っているなどと指導者の好みそうなことを言って接近した。略奪や騒乱に関心をもつ一般氏族民に対しては、財産略奪や婦女暴行を正当化することによって近づき、蜂起と挙兵を扇動した。こうして、アブー・ヤズィードは200騎を集めると、かれらを率いてバーガーヤをねらった。(Idrīs, vol. 5, pp. 173-4)

ولحق أبو زيد بكيانه ورحل إسماعيل من المسيلة غرة شهر رمضان يوم الجمعة سنة ٣٣٥ * فنزل بموضع يعرف بالناظور وهو موضع معروف بأروسن من جنات القلعة محاصراً لأبي يزيد ثم صعد يوم السبت الثاني من رمضان إلى الجبل كيانه وصعد في وعربين صُخُور ومشى فيها راجلاً في أماكن كثيرة * فكانت بينه وبين أبي يزيد فجة عظيمة تعرف بوفعة الحرين وأحرق فيها إسماعيل أنخصاصاً كثيرة لأصحاب أبي يزيد وقتل منهم عدداً كثيراً ثم انهزموا في آخر النهار وسبى إسماعيل نساءهم وذرائعهم وأخذ لهم من الخيل والجمال وصنوف الحيوان ما يبعث الإحصاء * ويستغرف الأسفساء * وارتبع أبو يزيد ودخل قلعة كيانه وهي تافزبوست المطلة على قلعة حماد ورجع إسماعيل على الناظور.

アブー・ヤズィードはキヤーナに立て籠もった。イスマール(ファーティマ朝のカリフ、マンスール)は335年ラマダーン月1日金曜日/947年3月25日、マスィーラから出発して砦(キヤーナ)の果樹園の一つであるナーズールまたはアルースンと呼ばれたところに軍営を張り、アブー・ヤズィードを包囲した。ついで、ラマダーン月の第2土曜日に、かれはキヤーナ山を登ったが、岩の間のでこぼこした道を登るために、多くの箇所ですべて徒歩で進まなければならなかった。かれとアブー・ヤズィードとの間には「火の戦い」として知られる大きな戦いが起こった。その戦いでは、イスマールはアブー・ヤズィードの兵の多くのあばら家に火を放ち、多くの者を殺した。ついに、かれらは日没前には敗走し、イスマールはかれらの女性、子供を捕虜にし、数えたり、調べたりできないほどのかれらの馬、ラクダ、その他の動物を奪った。アブー・ヤズィードは(山を)登ってキヤーナ砦に入った。その砦は(今日の)カルア(・パニー)・ハンマード市を見下ろすターカルブーサト山である。一方、イスマールはナーズールに戻った。(Ibn Ḥammād, pp. 31-2)

7.

ズィーリー朝の王タミーム・イブヌル・ムイッズの孫イブン・シャッダード ‘Abd al-‘Azīz b. Shaddād (d. after 582/1186) のカイラワーン史と、ハンマード朝 (首都カルア・バニー・ハンマード) の子孫イブン・ハンマードのハンマード朝史は散逸した。ただ、前者はイブヌル・アシール、イブン・ハッリカーン、ヌワイリー、マクリーズィーなどに、後者は編者不明 (14世紀初頭) の *Mafākhir al-Barbar* (ed. E. Lévi-Provençal, Rabat, 1934) やイブン・ハルドゥーン Ibn Khaldūn (d. 808/1406) の *Kitāb al-Ibar* (14 vols., Beirut, 1983-6) に、引用または利用されている。イブヌル・アシールはアラブ遊牧民がズィーリー朝支配下のイフリーキーヤに侵入した大変動について、イブン・シャッダードとエジプトの伝承とを総合し、イブン・ハルドゥーンは侵入したアラブのマグリブ定着や部族構成について、後世に成立したヒラル族英雄叙事詩をも交えながらも、他に類がない詳細な情報を提供する。

في هذه السنة دخلت العرب إلى إفريقية.
وسبب ذلك أنّ المعزّ بن باديس كان خطب للقاءم بأمر الله الخليفة
العباسيّ وقطع خطبة المستنصر العلويّ، صاحب مصر، سنة أربعين أربعمائة،
فلما فعل ذلك كتب إليه المستنصر العلويّ يتهدّد به، فأغلظ المعزّ في الجواب.
ثمّ إنّ المستنصر استوزر الحسن بن عليّ اليازوريّ، ولم يكن من أهل
الوزارة، إنّما كان من أهل التبانة والفلاحة، فلم يخاطبه المعزّ كما كان يخاطب
من قبله من الوزراء؛ كان يخاطبهم بعبد فحاطب اليازوريّ بصنيعته، فعظم
ذلك عليه، فعاتبه فلم يرجع إلى ما يحبّ، فأكثر الوقعة في المعزّ، وأغرى به
المستنصر، وشرعوا في إرسال العرب إلى الغرب، فأصلحوا بني زغبة ورياح،
وكان بينهم حروب وحقوق، وأعطوهم مالاً، وأمروهم بقصد بلاد القيروان،
وملّكوهم كلّ ما يفتحونه، ووعدوهم بالمدد والعُدَد. فدخلت العرب إلى إفريقية،
وكتب اليازوريّ إلى المعزّ: أمّا بعد، فقد أرسلنا إليكم خيولاً فحولاً. وحملنا
عليها رجالاً كهولاً. ليقضي الله أمراً كان مفعولاً.

وبلغ ذلك المعزّ فاحتقرهم، وكان المعزّ لما رأى تقاعد صنهاجة عن قتال
زناتة اشترى العبيد، وأوسع لهم في العطاء، فاجتمع له ثلاثون ألف مملوك.
وكانت عرب زُغبة قد ملكت مدينة طرابلس سنة ست وأربعين [وأربعمائة]،
فتباعت رياح والأثبج وبنو عديّ إلى إفريقية، وقطعوا السبيل وعاثوا في
الأرض، وأرادوا الوصول إلى القيروان، فقال مؤنس بن يحيى المرداسيّ: ليس
المبادرة عندي برأي؛ فقالوا: كيف تحب أن تصنع؟ فأخذ بساطاً فبسطه،

ثم قال لهم : من يدخل إلى وسط البساط من غير أن يمشى عليه ؟ قالوا : لا
نقدر على ذلك ! قال : فهكذا القَيروان ، خذوا شيئًا فشيئًا حتى لا يبقى
إلا القَيروان ، فخذوها حينئذ . فقالوا : إنك لشيخ العرب وأميرها وأنت المقدم
علينا ، ولسنا نقطع أمرًا دونك .

この年 (442/1050-1)、アラブ遊牧民がイフリーキーヤに入った。その原因は440年、ムイZZ・イブン・バーディースがアッバース朝のカリフ、カーイム・ビアムリッラーの名で、金曜日の礼拝の説教を行い、エジプトの支配者であるアリー朝 (ファーティマ朝) のムスタンスィルの名で行うことを止めたことである。かれがそうしたとき、ムスタンスィルはかれに手紙を送って脅した。すると、ムイZZの方も無作法な返事を返した。/その後、ムスタンスィルは宰相の家柄ではなく、農民出身のハサン・イブン・アリー・アル・ヤーズーリーを宰相に任命した。ムイZZはヤーズーリーに対しては、それ以前の宰相に (自分のことを) かれの奴隷として手紙を書いていたようにはせず、かれのお世話になった者として手紙を書いた。かれ (ヤーズーリー) はそれに悩まされ、かれ (ムイZZ) を非難したが、望むようにはしてもらえなかった。それで、かれはムイZZのことをさかんに中傷し、ムスタンスィルを扇動した。かれらはアラブを西方に送ろうと計画し、戦いあい、憎しみあっていたズグバ族とリヤーフ族に和平を結ばせ、資金を提供し、カイラワーンの国を目指せと命じた。かれらが征服した土地はすべてかれらが所有することを認め、援軍と装備を送ることを約束した。そして、アラブはイフリーキーヤに入った。ヤーズーリーはムイZZに次のような手紙を送った。「さて、我らは君に対し、勢いさかんな馬を送り、その上には成熟した男たちを乗せた。神が成されるべきことを決定なさるであろう。」……ムイZZはそれを聞くと、かれらを軽く見た。ムイZZはサンハージャ族がザナータ族との戦闘を避けているのを見ると、奴隷を買い求めて、高給を払った。こうして、3万人の奴隷 (サンハージャ族傭兵) がかれのもとに集まった。ルグバ族のアラブは446/1054-5年、タラーブルスの支配者となり、リヤーフ族、アスバジュ族、アディー族はイフリーキーヤへとあいついで進み、街道を襲い、各地を蹂躪しながら、カイラワーンへと目指した。ミルダース族のムーニス・イブン・ヤフヤーが「急ぐことはない。私に考えがある」と言うと、かれらは「どうしたいのか」と尋ねた。かれはじゅうたんを取って、広げ、「じゅうたんを踏まずに、真ん中に入れる者はいるか」と聞いた。かれらが「いや、できない」と答えると、かれは「カイラワーンもこの通りである。少しずつ、(周辺を) 占領し、カイラワーンだけしか残らないようになってから、そこを取ろう」と言った。かれらは「君こそがアラブの長老であり、軍指揮者であり、我らの指導者である。我らは君の意見を聞かずに、事を決することはしない」と言った。(Ibn al-Athīr, vol. 9, pp. 566-7)

كان هؤلاء الأتبع من الهلاليين أوفر عددًا وأكثر بطونًا، وكان التقدم لهم في جملتهم. وكان منهم: الصَّحَّاح وعياض ومُقَدَّم والعاصم ولطيف ودُرَيْد وكُرفة وغيرهم حسبما يظهر في نسبهم. وفي دريد بطنان: توبة وعنز. ويقولون بزعمهم إن أتبج هو ابن أبي ربيعة بن مُهَيْك بن هلال. فكُرفة هو ابن الأتبج وكان لهم جمع وقوة وكانوا أحياء غزيرة من جملة الهلاليين الداخلين لإفريقية. وكانت مواطنهم حيال جبل أوراس من شرقية. ولما استقر أمر الأتبج بإفريقية على غلب صنهاجة على الضواحي ووقعت الفتنة بينهم، وذلك أن حسن بن سرحان وهو من دريد قتل شُبَّانَةَ بن الأَحْمِر من كُرفة غيلة، فطوت كُرفة على الهائم.

ثم أن أخته الجازية غاضبت زوجها ماضي بن مقرب بن قرة، ولحقت بأخيها فمنعها منه فاجتمعت قرة وكُرفة على فتنة حسن وقومه، وظاهرتهم عياض. ولم تزل الفتنة إلى أن قتل حسن بن سرحان. قتله أولاد شُبَّانَةَ بن الأَحْمِر، وثأروا منه بأبيهم. ثم كان الغلب بعده لِدُرَيْد على كُرفة وعياض وقرة. واستمرت الفتنة بين هؤلاء الأتباع، وافترق أمرهم. وجاءت دولة الموَحِّدين وهم على ذلك الشتات والفتنة،

ヒラル族の中で、これらアスバジュ族がもっとも多数で、氏族の数も多く、指導権が(特定の氏族ではなく)全体に属している。かれらの系図にあるように、ダッハーク、イヤード、ムカッダム、アースィム、ラティーフ、ドウライド、カルファ、その他(の氏族)がある。うちドウライド族はタウバとアンズの2つの氏族に分かれる。かれらが言うには、アスバジュはヒラルの子ヌハイクの子アブー・ラビーアの子であり、カルファはアスバジュの子という。かれらは数が多く、力が強く、イフリーキーヤに入ったヒラル族全体の中でも有力な諸氏族であった。かれらの居住区はアウラース山地の東側の周辺である。サンハージャ族から諸地方を奪うことによって、イフリーキーヤでアスバジュ族の覇権が確立したとき、かれらの間で内紛が起きた。その原因は、ドウライド族のハサン・イブン・サルハーンがカルファ族のシュッバーナ・イブヌル・ウハイミルを謀殺し、カルファ族が水がない地に追いやられたことである。/つぎに、かれ(ハサン)の姉妹ジャーズィヤが夫であるマーディー・イブン・ムカッラブ・イブン・クッラを怒らせ、兄弟のもとに逃げた。兄弟はかの女を夫から守ったため、クッラ族とカルファ族がハサンとかれの氏族と戦うため連合した。イヤード族もかれらを助けた。内乱はシュッバーナ・イブヌル・ウハイミルの子供たちがハサン・イブン・サルハーンを殺し、父の仇をとるまで続いた。かれの死後も、ドウライド族がカルファ族、イヤード族、クッラ族に対して優勢であり、これらのアスバジュ族間の内紛は続き、かれらの勢力は分裂した。(12世紀半ばに)ムワッヒドゥーンの国家が攻めて来たのは、かれらがそういう分裂と内紛の最中に

あるときであった。(Ibn Khaldūn, vol. 11, pp. 48-9)

8.

イドリース朝崩壊後の10世紀のモロッコについては、同時代のアンダルスの歴史家、ラーズィー父子 Aḥmad al-Rāzī (d. 344/955), ‘Īsā (d. 379/987) やワッラークが詳細に伝えている。ラーズィーの歴史は失われたが、11世紀のアンダルス最大の歴史家イブン・ハイヤーン Abū Marwān Ibn Ḥayyān (d. 469/1076) のアンダルス史 *al-Muqtabas* (ed. P. Chalmeta, M. Šubḥ, Madrid, 1979) にそっくり引用されている。また、前述した *Mafākhir al-Barbar* が10世紀末から11世紀前半に関するイブン・ハイヤーンの他の史書や、ワッラークの史書の大きな部分をそのまま抜粋しているし、イブン・ハルドゥーンが他の情報をも総合して、10-11世紀のモロッコの諸部族の歴史を体系的に提示している。11世紀後半から12世紀前半のムラービトゥーン史については、イブン・イザーリーの *Bayān* (vol. 4, ed. Iḥsān ‘Abbās, 1980) とイブヌル・カッターン Ibn al-Qaṭṭān (13世紀半ば) の *Naẓm al-Jumān* (ed. Maḥmūd ‘Alī Makkī, Rabat, no date) に詳しい。

9.

地誌もまた貴重な同時代の情報を提供している（ただし、過去の文献を引用した結果、データが時代遅れになっている場合も多い）。東方の地誌では、アッバース朝の官僚と思われるヤアクービー al-Ya‘qūbī (9世紀後半) の *Kitāb al-Buldān* (ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1892) と、商人と思われるイブン・ハウカル Ibn Ḥawqal (10世紀半ば) の *Ṣūrat al-Ard* (ed. J. H. Kramers, Leiden, 1938) がもっとも重要である。アンダルスでも10世紀末、ワッラークによって *Kitāb al-Masālik wa’l-Mamālik* が著され、これは散逸したものの、コルドバのバクリー Abū ‘Ubayd al-Bakrī (d. 487/1094) の *Kitāb al-Masālik wa’l-Mamālik* (*Description de’l-Afrique septentrionale*, ed. W. McGuckin de Slane, Paris, 1965) に利用されている。バクリーの地誌はワッラークに拠るだけでなく、11世紀半ばのマグリブとサハラ砂漠、サーヒル地方の政治、経済、社会、民俗について他に類がない詳細な情報を含み、とくに勃興期のムラービトゥーンについては重要である。つぎに、ズフリー Ibn Abī Bakr al-Zuhrī の地誌 *Kitāb al-Jughrāfiya* (ed. Muḥammad Ḥājj Šādiq, Cairo, no date) とイドリースィー al-Idrīsī (d. 560/1165) の *Nuzhat al-Mushtāq fi’khtirāq al-Āfāq* (2 vols., Cairo, no date) が12世紀前半のマグリブを詳細に記述している。過去の種々の地誌を大幅に利用したイブン・アブディル・ムンイム Ibn ‘Abd al-Mun‘im al-Ḥimyarī (没年不詳) の

大地名事典 *al-Rawḍ al-Mi'ṭār* (ed. Iḥsān 'Abbās, Beirut, 1984) は、マグリブの諸項目がヤークート *Yāqūt al-Rūmī* の地名事典 *Mu'jam al-Buldān* よりはるかに充実している。

ويقارب القيروان سجلماسة في صحّة الهواء ومجاورة البيداء مع تجارة غير منقطعة منها إلى بلد السودان وسائر البلدان وأرباح متوافرة ورفاق متقاطرة وسيادة في الأفعال وحسن كمال في الأخلاق والأعمال يخرجون برسومهم عن دقة أهل المغرب في معاملاتهم وعاداتهم إلى عمل بالظاهر كثير وتقدم في أفعال الخير شهير وحنوّ بعض على بعض من جهة المروءة والفتوة وإن كانت بينهم الحنات والتبرات القديمة تواضعوها عند الحاجة وأظرحوها رياسةً وسماحةً وكرمَ سجيّة تختصهم وأدب نفوس وقف عليهم بكثرة أسفارهم وطول تغربهم عن ديارهم وتعزّبهم من أوطانهم، دخلتها في سنة أربعين فلم أر بالمغرب أكثر مشائخ في حسن سمت وممازجة للعلم وأهله إلى سعة نفوس عالية وهم سامقة سامية، وسائر أرباب المدن دونهم في اليسار وسعة الحال وتتقارب بالعصبية أوصافهم وتتشاكل أحوالهم ولقد رأيت بأودغست صكًا فيه ذكر حقّ لبعضهم على رجل من تجّار أودغست وهو من أهل سجلماسة باثنين وأربعين ألف دينار وما رأيت ولا سمعتُ بالمشرق لهذه الحكاية شيئًا ولا نظيرًا ولقد حكيتها بالعراق وفارس وخراسان فاستظرفّت، ولم يزل المعتبر أيام ولايتها وهو أميرها يجتبيها من قوافل خارجة إلى بلد السودان وعشيرة وخراج وقوانين قديمة [على] ما يباع بها ويشتري من إبل وغنم وبقر إلى ما يخرج عنها ويدخلها من نواحي إفريقية وفاس والأندلس والسوس وأغمات إلى غير ذلك ممّا على دار الضرب والسكة زهاء أربع مائة ألف دينار تختصّ بها وبعملها.

スィジュールマーサ (モロッコ南東部のオアシス都市) は空気の良さと砂漠に隣接すること、それに、黒人の国やその他の国々と途切れることなく貿易が行われ、潤沢な利益が生まれ、隊商が往来し、行為が紳士的で性格と行いが良く、完璧である点でカイラワーンに似ている。かれらの慣習は取引、慣行においてマグリブの人々の矮小さから抜け出ており、こそこそしない行いが多く、慈善行為をすすんで行うことは有名であり、たがいのいつくしみあいは男子の道や若者の道に由来している。かれらの間に憎しみや古い復讐心があったとしても、必要とあれば、指導性と寛大さ、かれらの特徴づける気質の気高さ、心の修養のゆえに、謙虚になってそれを捨て去る。そういったことは多くの旅を行い、長く家を留守にし、故郷から離れることによって、かれのものとなった。私は340/951-2年スィジュールマーサに入ったが、人柄の良さ、知識との触れ合い、さらに気高い心の広さ、純粹で高い関心において、マグリブでかれら以上の長老を見たことはない。諸都市の他の指導者層

は生活の安逸さ、裕福さにおいてかれらに劣り、部族的党派精神で結びつきあい、生活状態も似かよっている。私はアウダゴシュト（サハラ砂漠西部中のオアシス都市）でその商人の一人（かれもまたスィジュールマーサの人の一人であるが）がスィジュールマーサのある商人に負った額面4万2千ディーナールの小切手を見たことがある。私は東方でこれに匹敵する話を見たことも聞いたこともない。私はこの話をイラクでもファールスでもホラーサーンでもしたが、珍奇な話と受けとめられた。スィジュールマーサの支配者ムッタツズ (309-21/921-33) はかれの時代、そこ（スィジュールマーサ）とその領域だけで、黒人の国へ出る隊商と、十分の一税と地税、そこで売買されるラクダ、羊、牛、及び、イフリーキーヤ、フェーズ、アンダルス、スース（モロッコ南部）、アグマート（マッラークシュ近郊）から出入りするものに対して課された古くからの雑税、さらにその他、造幣局からの収入（手数料）を含め、およそ40万ディーナールの税収を（毎年）得ていた。（Ibn Hawqal, pp. 99-100）

إلى قبيل من صنهاجة يعرفون ببني لمتونة ظواعن رحالة في الصحراء
مراحلهم فيه مسيرة شهرين في شهرين ما بين بلاد السودان وبلاد الإسلام
ويصيفون في موضع يسمى أمّطلوس وآخر يسمى تاليوتين وهم إلى بلاد السودان
أقرب بينهم وبين بلاد السودان نحو عشر مراحل وليس يعرفون حرثاً ولا
زرعاً ولا خبزاً إنما أموالهم الأنعام وعيشهم من اللحم واللبن ينجد عمر أحدهم
وما رأى خبزاً وأكله إلا أن يمر بهم التجار من بلاد الإسلام أو بلاد السودان
فيطعمونهم الخبز ويتحفونهم بالديف و هم على السنة مجاهدون للسودان وكان
رئيسهم محمد المعروف بتارشني من أهل الفضل والدين والحج والجهاد وهلك
بموضع يقال له فنفاة من بلاد السودان وهم قبيل من السودان بغربي مدينة
بانكلايين وهي مدينة يسكنها جماعة من المسلمين يعرفون ببني وارث من
صنهاجة وخلق بني لمتونة قبيلة من صنهاجة تسمى بني جدالة وهم يجاورون
البحر ليس بينهم وبينه أحد وهذه القبائل هي التي قامت بعد الأربعين وأربع
ماية بدعوة الحق ورد المظالم وقطع جميع المغارم وهم على السنة متمسكون
بمذهب مالك بن أنس رضي الله عنه وكان الذي نهج ذلك فيهم ودعا الناس
إلى الرباط ودعوة الحق عبد الله بن ياسين وذلك أن رئيسهم كان يحيى بن
إبراهيم من بني جدالة وحج في بعض السنين ولفى في صدره عن حجة البقية
أبا عمران الهاسي فسأله أبو عمران عن بلده وسيرته وما ينتقلونه من
المذاهب فلم يجد عنده علماً بشيء إلا أنه رآه حريصاً على التعلم صحيح النية
واليقين فقال له ما يمنعكم من تعلم الشرع على وجهه والأمر بالمعروف والنهي
عن المنكر قال له لا يصل إلينا إلا معلمون لا ورع لهم ولا علم بالسنة عندهم

ورغب إلى أبي عمران أن يرسل معه من تلاميذه من يثق بعلمه ودينه ليعلمهم
ويقيم أحكام الشريعة عندهم.

(そこから) 砂漠の中を移動するラムトゥーナ族として知られるサンハー
ジャ族の一部族 (の居住地) に至る。かれらが移動する地域は黒人の国とイ
スラームの国との間で、縦、横ともに2カ月の距離がある。夏はアマトル
スというところとターリユーヤンというところで過ごす。かれらからは黒人
の国の方が近く、黒人の国へはおよそ10日ほどの行程である。かれらは土地
を耕すことも、種をまくことも、パンを焼くことも知らないし、かれらの財
産は家畜であり、食料は肉とミルクである。イスラームの国または黒人の国
から来た商人がかれらのそばを通して、かれらにパンを食べさせたり、小麦
粉を贈ったりすることがあるものの、パンを見たことも、食べたこともなく
一生を過ごす者もいる。かれらはスンナ (預言者の慣行) に従い、黒人に対
し聖戦を敢行している。かれらの指導者、ターラシュナーとして知られるム
ハンマドは有徳で、信仰あつく、巡礼や聖戦を行っていたが、黒人の国のカン
カーラというところで殺された。(カンカーラは本来は) パーנקラービ
ーン市の西方に住む黒人の部族のことである。それはサンハージャ族の一派
でワーリス族として知られるムスリムが多く住む都市である。ラムトゥーナ
族の背後には、グッダーラ族というサンハージャ族の一部族がいる。かれら
は海 (大西洋) に面して住み、海までの間には他の誰も住まない。これらの
諸部族が440/1048-9年以後、真理を宣教し、不正を排除し、あらゆる不法
な税を廃止した人々であり、スンナに従い、とくに故マーリク・イブン・ア
ナスの法解釈をかたく信奉している。かれらにそれを紹介し、リバート (砦
兼伝導所) と真理の宣教に人々を引きつけたのはアブドゥッラー・イブン・
ヤースィーンである。その理由は次のとおりである。かれらの指導者、グッ
ダーラ族のヤフヤー・イブン・イブラーヒームがある年に巡礼し、巡礼から
の帰途、(カイラワーンで) 法学者アブー・イムラーン・アル・ファースィ
ーに会った。アブー・イムラーンがかれの国や生活慣行、かれらが信奉して
いる法解釈について尋ねたとき、何も知らないことがわかった。しかし、か
れはかれ (ヤフヤー) が知識の取得に熱意をもち、意図と信仰が正しいのを見
ると、かれに「どうして法を正しく学び、善を薦め、悪を禁じることがで
きないのか」と尋ねた。かれは「我々のところには敬虔ではなく、スンナの
知識もない教師しか来ないからです」と答え、アブー・イムラーンに対し、
知識と信仰の点で信頼できる弟子の一人を派遣し、かれらを教え、法に基づ
いた裁きを行ってくれるように頼んだ。(Bakrī, pp. 164-5)